

# 2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題及び解答例

研究科・専攻 【人文科学研究科 歴史学専攻 (日本史学コース) 博士後期課程】
試験科目 【専門試験 歴史学一般】

## 【出題意図】

日本史学分野における高度で専門的な学識と研究能力を修得し、博士後期課程での学修に必要な学力を有しているか。また、提示された諸情報・条件に基づき考察を行い、現在の研究状況を踏まえて論理的な文章を書く力を有しているかを問う。

【問】 古代における国家形成期を規定し、その特徴・過程について述べよ。

## 【評価のポイント】

日本古代における国家形成期をどの時期に認めるのか。設定は任意であるが、その理由を論理的に述べるのが第一に求められる。また、前後の時期との違いがどの点にあるのかも明確であること。制度・軍事・外交といった外形的な面だけではなく、イデオロギー的側面にも触れる必要がある。日本古代の国家形成をめぐる研究史の流れが踏まえられていることも必要である。

【問】 日本古代史研究における在地首長制論について、その概要や学史的意義、課題について述べよ。

## 【評価のポイント】

まず、在地首長制の定義が必要である。中央集権的律令国家像の相対化という点のみならず、首長制に関する人類学的な理解も求められる。石母田正による提起からおよそ半世紀を経た現在にいたるまでの、本論に関する学史的な流れもおさえておきたい。また、課題については、郡司制度や地方社会の実態についてなど、具体例を挙げながら説明するのが望ましい。

【問】 あなたの日本史研究における史資料の重要性について、実例を示しながら述べなさい。

## 【評価のポイント】

自分自身の研究テーマを明示し、そこで使用する古文書・古記録を具体的に明示し、その史資料から導き出すことが予測可能な事柄について論じる必要がある。

自分の使用する史資料について、基本的な情報を体得できているのか、内容の基礎的研究はすすんでいるのか、など博士課程において必要な知識・技術・能力が備わっているのかを文章化する必要がある。そこでは豊かな表現力も求められる。

【問】 戦国時代に関する研究において、近年の研究において、江戸期以来いわれてきた通説の多くが見直されている。そうした事項について、具体例をあげたうえで研究史上の意義を述べなさい。

・かつて戦国の始まりは応仁・文明の乱と言われていたが、東国では、1467年の応仁の乱より前に戦国時代に突入していたこと、享徳の乱が応仁の乱の一因となっていた、など明らかにされている。

・応仁・文明の乱について、8代将軍義政後継者に弟義視を擁立後、実子義尚を時期将軍としたい将軍正妻日野富子と義視の対立に、諸家の家督争いが連繋して長期化、と従来理解されてきたが、近年、将軍家の家督争いは副次的な

# 2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題及び解答例

ものと考えられている。近年は、乱勃発の要因は管領をはじめとする諸大名家の後継者争い、幕府政治をめぐる諸大名の主導権争い、幕府政治の矛盾などがあげられている。乱後の義視と義政の和解成立ののち、公家社会の立て直しには、日野富子の私財があてられたことから、『尋尊大僧正記』の記事をもとに、敵方の大名にまで高利で貸し付けた富子は悪女という通説も見直されている。

・室町幕府6代将軍足利義教が殺害されると、足利将軍の権威は低下し、応仁・文明の乱以降とくに幕府は弱体化著しかったと理解されてきたが、近年は12代義晴が近江朽木に移った後も、支えた奉公衆・奉行衆・昵近公家衆・外様衆・御供衆・御部屋衆・申次衆・番衆・同朋衆・女房衆ら、幕府を構成する人員が揃って亡命先での幕府政治が可能であったことが明らかである。

・室町幕府15代将軍足利義昭の政権は織田信長の傀儡政権で、最終的に信長が政権奪取のために京都を追放したことで室町幕府は滅亡したという従来の説に対しては、信長が目指していたものは将軍を頂点とした京都の安寧で、義昭は京都を追放されても征夷大将軍であり、義昭を支持する勢力に将軍権威は保たれていたといわれる。

・戦国大名とは、上杉謙信・武田信玄・毛利元就など、大名当主が強大な権限と強固な武力をもって領国支配する存在と長い間とらえられてきたが、近年の研究では、戦国大名家の当主≠「戦国大名」で、戦国大名家の当主＝「家」権力の統括者であって、「戦国大名」とは、大名家当主を頂点に家族・家臣を含めた組織、経営体とみられている。

・かつて理解されていたように、戦国大名が支配下の村に容赦ない収奪を行うことは有り得ない。戦国大名の支配は納税する村があって成立するもので、村が成り立たなくなることは戦国大名領国が崩壊することになるからである。

・信長の上洛以降、死去までの戦争は、全国統一を目指した戦争であった、と理解されてきたが、近年は見直されている。信長の用いた印章の印文「天下布武」の「天下」は、将軍が治めていた五畿内を中心とする地域の意であり、義昭とともに上洛した後の信長は、将軍による「天下静謐（＝五畿内の政治秩序安定）」を大義名分に行動していたと理解されている。信長の残忍な比叡山焼き討ちも、実行前に何度となく多方面から味方するよう説得したにもかかわらず、反抗を続けた結果であったといわれる。

【問】江戸時代における武家社会研究の現状と課題について述べよ。

【評価のポイント】

武家社会の研究動向として、江戸城における幕府年中行事や参勤交代などに伴った贈答儀礼に関する研究、江戸城などの奥向に関する研究などを取り上げることが必要となる。また、各藩の藩政史研究の動向に留意しつつ、武家社会研究の広がりや、それに関係した新たな課題を示すことを求める。

【問】未発掘の旧家の土蔵を新規に調査することになった。あなたがとるべき行動・手順について述べなさい。

【解答に求められる要素・評価のポイント】

- ①土蔵の所蔵者である旧家の方への調査方法および調査後の保存について説明し、了解を得ること。
- ②資料の現状記録の実施（写真やメモにより保存状況を記録）。
- ③資料全体を確認後、調査の進め方についての検討と所蔵者（旧家）および関係者への説明と承認。

以上、3点について、調査実施の時系列に沿って述べることが望まれる。

# 2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題及び解答例

【問】日本における近世国家と近代国家の違いについて、自分でテーマを設定して論述せよ。

【評価のポイント】

近世国家と近代国家の違いを理解することは、明治維新の位置づけを理解することにつながる。具体的には、近世国家の特質である石高制が地租改正を経て解体され、この土地制度の改革によって新たな税制が創設されること。あるいは、近世の兵農分離が解消されて四民平等となったからこそ、徴兵令の制定が可能だったことを正しく理解しているかなど問う問題である。近代国家における「国民」の創出を論じてよい。この点は (AP1) に関連する。また、出題の意図を反映した記述になっているか、歴史用語を正確に理解しているか、歴史的な原因・経過・結果・影響などの因果関係を正しく理解しているかなどは、(AP3) に関する評価ポイントになる。

【問】1920年代における、いわゆる「幣原外交」について、その国際協調性のあり方や限界性について論じなさい。

【評価のポイント】

「中国に関する9カ国条約」(ワシントン会議において締結:1922年2月)や、国際連盟規約、不戦条約などによって、いわゆる「ワシントン体制」が構築されたと理解されている。幣原喜重郎は、そうした国際条約を順守することによって、平和的で安定的な太平洋・東アジア秩序の構築を目指した、「幣原外交」を展開する。だが、そうした一方で、満蒙権益を重視する幣原は、「満鉄中心主義」とも言いうる価値観に拘束されていた。満州事変が1931年に勃発すると、勃発から1カ月間は不拡大方針を掲げその解決にまい進した幣原だったが、10月15日には「五大綱目」を示し、その中で中国大陸からの日本軍撤兵条件として「満鉄併行線問題」の解決を掲げるに至る。これにあって事変の解決のハードルが上がってしまった。「満鉄中心主義」に取り込まれ、外交の選択肢の幅を縮めてしまった点に、「幣原外交」の限界が見て取れる。この点について、説得的に論じられていることが重要である。

【問】満洲国で行われた「民族協和」に関連した文化政策についてその特徴を論述せよ。

【評価のポイント】

満洲国の建国理念とされた民族協和の形成過程とその内容を理解した上で、満洲国で行われた満洲映画協会などを通じたプロパガンダ政策の歴史とその問題点を実証的に論じること。

【問】戦後日中関係における米ソ冷戦の影響について論述せよ。

【評価のポイント】

米ソ冷戦構造を正しく理解した上で、日中国交正常化前の後期集団引揚やLT貿易などに代表される日中非公式接触、および国交正常化後の改革開放政策をめぐる日本の対中援助について実証的に論じること。

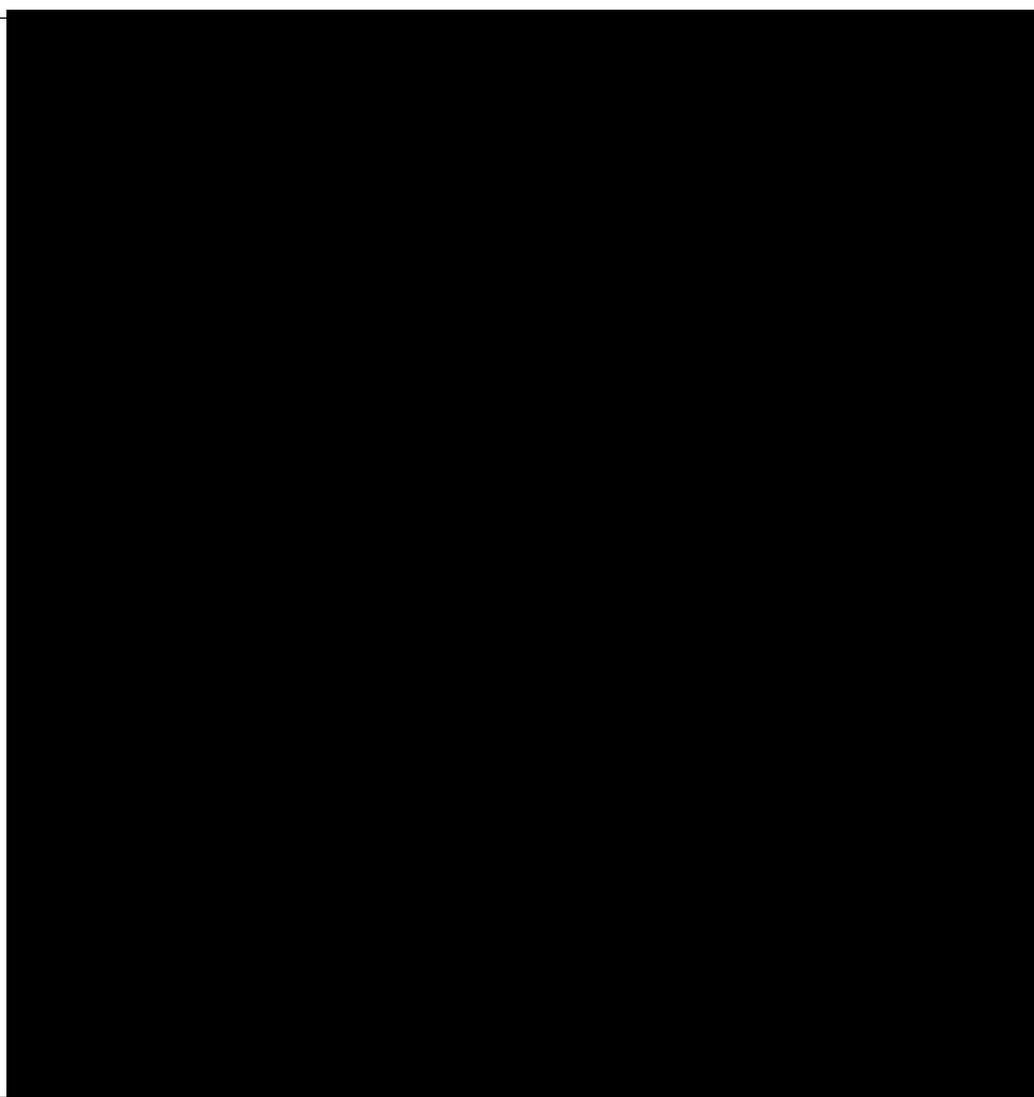
# 2026 年度 駒澤大学大学院 2 月 入学試験問題及び解答例

研究科・専攻 【人文科学研究科 歴史学専攻 (日本史学コース) 博士後期課程】
試験科目 【外国語試験 英語】

**【出題意図】**

大学院で研究を行っていく上での、必要最低限の英語力を問う。

**【問】** 次の英文を、日本語に全訳せよ。



**【出典】** 河野康子監修・講談社インターナショナル株式会社編

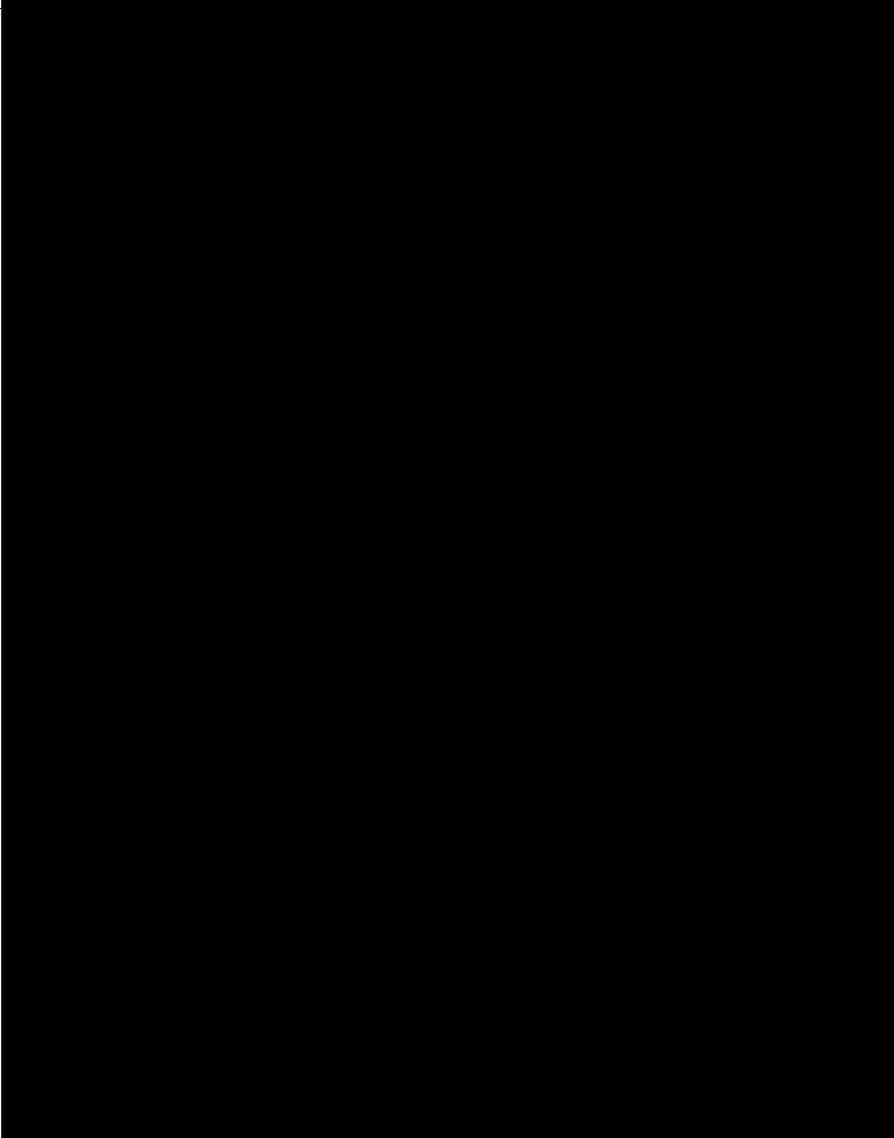
『増補改訂第2版 英語で読む日本史』（2006年、講談社インターナショナル株式会社）117頁

2026 年度 駒澤大学大学院 2 月 入学試験問題及び解答例

---

【解答例】

---



# 2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題及び解答例

## 【人文科学研究科 歴史学専攻（日本史学コース）博士後期課程】

### （科目）【資料解読】

【出題意図】日本史学分野における資料解読能力を修得し、資料の背景にある政治・経済・社会・文化・宗教などに関する基礎知識を有しているか。また、資料内容について考察を行い、論理的な文章を書く力を有しているかを問う。

次の

八月丙申朔庚子、拜<sub>ニ</sub>東國等國司<sub>一</sub>。仍詔<sub>ニ</sub>國司等<sub>一</sub>曰、隨<sub>ニ</sub>天神之所奉寄<sub>一</sub>、方今始將<sub>レ</sub>修<sub>ニ</sub>萬國<sub>一</sub>。凡國家所有公民、大小所領人衆、汝等之<sub>レ</sub>任、皆作<sub>ニ</sub>戶籍<sub>一</sub>、及校<sub>ニ</sub>田畝<sub>一</sub>。其菌池水陸之利、與<sub>ニ</sub>百姓<sub>一</sub>俱。又國司等、在<sub>レ</sub>國不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>判<sub>レ</sub>罪。

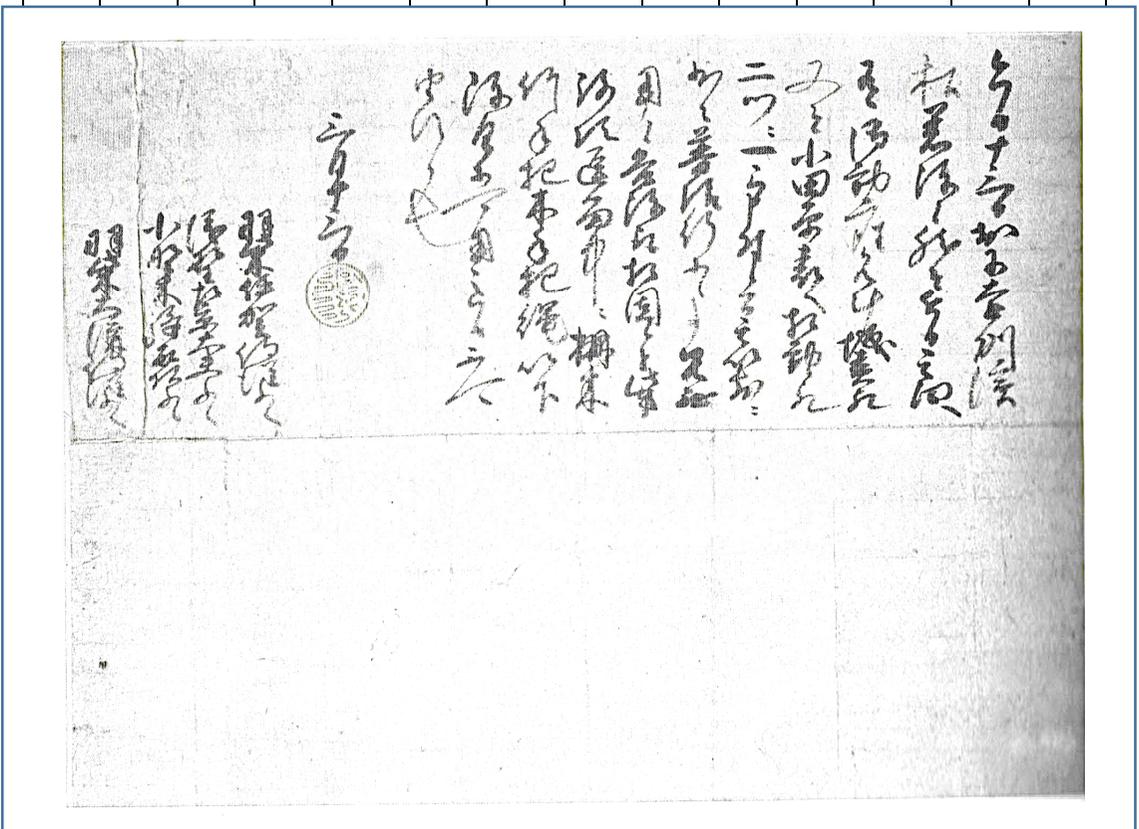
不<sub>レ</sub>得<sub>下</sub>取<sub>ニ</sub>他貨賂<sub>一</sub>、令<sub>モ</sub>致<sub>ニ</sub>民於貧苦<sub>一</sub>。上<sub>レ</sub>京之時、不<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>多從<sub>ニ</sub>百姓於己<sub>一</sub>。唯得<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>從<sub>ニ</sub>國造・郡領<sub>一</sub>。但以<sub>ニ</sub>公事<sub>一</sub>往來之時、得<sub>レ</sub>騎<sub>ニ</sub>部内之馬<sub>一</sub>、得<sub>レ</sub>飡<sub>ニ</sub>部内之飯<sub>一</sub>。介以上、奉<sub>レ</sub>法必須褒賞。違<sub>レ</sub>法當降<sub>ニ</sub>爵位<sub>一</sub>。判官以下、取<sub>ニ</sub>他貨賂<sub>一</sub>、二倍徵之。遂以<sub>ニ</sub>輕重<sub>一</sub>科<sub>レ</sub>罪。其長官從者九人、次官從者七人、主典從者五人。若違<sub>レ</sub>限外將者、主與<sub>ニ</sub>所從<sub>一</sub>之人、並當科<sub>レ</sub>罪。若有<sub>ニ</sub>求<sub>レ</sub>名之人<sub>一</sub>、元非<sub>ニ</sub>國造・伴造・縣稻置<sub>一</sub>、而輒詐訴言、自<sub>ニ</sub>我祖時<sub>一</sub>、領<sub>ニ</sub>此官家<sub>一</sub>、治<sub>ニ</sub>是郡縣<sub>一</sub>。汝等國司、不<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>隨<sub>レ</sub>詐便牒<sub>ニ</sub>於朝<sub>一</sub>。審得<sub>ニ</sub>實狀<sub>一</sub>而後可<sub>レ</sub>申。又於<sub>ニ</sub>閑曠之所<sub>一</sub>、起<sub>ニ</sub>造兵庫<sub>一</sub>、收<sub>ニ</sub>聚國郡刀甲弓矢<sub>一</sub>、邊國近與<sub>ニ</sub>蝦夷<sub>一</sub>接<sub>レ</sub>境處者、可<sub>下</sub>盡數<sub>ニ</sub>集其兵<sub>一</sub>、而猶假<sub>中</sub>授本主<sub>上</sub>。其於<sub>ニ</sub>倭國六縣<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>遣使者、宜<sub>下</sub>造<sub>ニ</sub>戶籍<sub>一</sub>、并校<sub>中</sub>田畝<sub>上</sub>。謂<sub>レ</sub>檢<sub>ニ</sub>覈墾田頃畝<sub>一</sub>及民戶口年紀<sub>一</sub>。汝等國司、可<sub>ニ</sub>明聽退<sub>一</sub>。即賜<sub>ニ</sub>帛布<sub>一</sub>、各有<sub>レ</sub>差。

出典：『日本書紀 下』（日本古典文学大系、岩波書店、一九六五年）

### 【評価のポイント】

本史料は『日本書紀』大化元年八月庚子（五日）条であり、いわゆる東国国司詔の一つに当たる部分である。逐語訳ではなく、大化前代から律令国家成立期における王権の地方支配制度について理解していることが求められる。なお、読み下し文については、出典元にその一例がある。

左の文書について、(一) 翻刻文を記したうえで、(二) 関連する事柄について知るところを述べなさい。



(一) 今日十三日、於于遠州濱

松着陣候、然者、近日其面へ

有御動座、見計城責歟、

又者、小田原表へ相動候歟、

二ツニ一被申付候間、其以前ニ

少々普請・行等之事、先無

用候、各陣取相固候者、此方

路次逗留中ニ柵木・

竹手把・木手把繩以下、

陣具等、可用意候、不可

由断候也、

三月十三日(秀吉朱印)

羽柴伊賀侍従とのへ

浅野左京大夫とのへ

小野木縫殿頭とのへ

羽柴大溝侍従とのへ

(二) 本文書は、羽柴秀吉の朱印状で、小田原北条氏を攻めるために遠江浜松に着陣したと見えることから、発給年次は天正十八年である。

宛所の羽柴伊賀侍従は伊賀上野城主の筒井定次、浅野左京大夫は秀吉の相婿である浅野長政の子の幸長、小野木縫殿頭は秀吉の家人で

あった小野木重次(重勝)、羽柴大溝侍従は近江高島城主で秀吉別妻浅井茶々の妹初の夫の京極高次である。

大軍を率いて京を出発した秀吉は、三月十三日に義弟である徳川家康領国の浜松に到着し、先発隊として出陣している筒井定次・浅

野幸長・小野木重次・京極高次の四人に対して、自身が到着するまでに城を包囲するための柵木や縄などの用意するよう命じた。

小田原合戦の要因は、いわゆる名胡桃城奪取事件もその一つではあるが、秀吉との交渉は家康の斡旋のもと従属を受け入れていたが、

秀吉への取次である家康自身が同事件の当事者であったこと、秀吉側の取次が機能不全に陥っていたこと、早急の氏政上洛を秀吉が最

重要と認識して誤解が生じていたこと、氏政の身上保証が確保されていなかったことなどが考えられる。

次の史料のうち傍線部の文意を解釈し、この史料が出された時代背景について述べなさい。

我朝上古ノ制、海内拳テ兵ナラザルハナシ。有事ノ日、天子之ガ元帥トナリ、丁壮兵役ニ堪  
ユル者ヲ募リ、以テ不レ服ヲ征ス。役ヲ解キ家ニ帰レバ、農タリ工タリ又商賈タリ。固ヨリ後  
世ノ双刀ヲ帯ビ武士ト称シ抗顔坐食シ、甚シキニ至テハ人ヲ殺シ、官其罪ヲ問ハザル者ノ如  
キニ非ズ。抑 神武天皇珍彦ヲ以テ葛城ノ国造トナセシヨリ、爾後軍団ヲ設ケ衛士防人ノ制  
ヲ定メ、神龜天平ノ際ニ至リ六府二鎮ノ設ケ始テ備ル。保元平治以後朝綱頹弛、兵權終ニ武  
門ノ手ニ墜チ、国ハ封建ノ勢ヲ為シ人ハ兵農ノ別ヲ為ス。降テ後世ニ至リ、名分全ク泯没シ  
其弊勝テ言フ可カラズ。然ルニ太政維新、列藩版図ヲ奉還シ、辛未ノ歳ニ及ビ遠ク郡県ノ古  
ニ復ス。世襲坐食ノ士ハ其禄ヲ減ジ刀剣ヲ脱スルヲ許シ、四民漸ク自由ノ權ヲ得セシメント  
ス。是レ上下ヲ平均シ人權ヲ齊一ニスル道ニシテ、則チ兵農ヲ合一ニスル基ナリ。是ニ於テ、  
士ハ従前ノ士ニ非ズ民ハ従前ノ民ニアラズ、均シク皇国一般ノ民ニシテ、国ニ報ズルノ道モ  
固ヨリ其別ナカルベシ。凡ソ天地ノ間一事一物トシテ税アラザルハナシ。以テ国用ニ充ツ。  
然ラバ則チ、人タルモノ固ヨリ心力ヲ尽シ国ニ報ゼザルベカラズ。西人之ヲ称シテ血税ト云  
フ。其生血ヲ以テ国ニ報ズルノ謂ナリ。且ツ国家ニ災害アレバ人々其災害ノ一分ヲ受ザルヲ  
得ズ。是故二人々心力ヲ尽シ国家ノ災害ヲ防グハ則チ自己ノ災害ヲ防グノ基タルヲ知ルベ  
シ。苟モ国アレバ則チ兵備アリ、兵備アレバ則チ人々其役ニ就カザルヲ得ズ。(後略)

(近代日本思想体系4『軍隊 兵士』岩波書店、一九八九年)

### 【文意】

維新変革によって諸藩は版籍奉還を行い、明治四年(辛未)には廃藩置県(郡県ノ古ニ復ス)が断行された。世襲の武士は家禄を減じて脱刀を許可し、四民は平等になって自由の権利を得るようになった。これは上下の身分を平均して人權を同じくする道であり、すなわち、兵士と農民を同じくする基本である(兵農分離の解消)。これにより、武士はこれまでの武士ではなく、民(農・工・商)はこれまでの民ではない。(士・農・工・商は)等しく皇国 $\parallel$ 日本の民であり、国に報いる方法もおのずとその区別はなくなる。およそ世の中で一事一物として税でないものはない。よって(税金を)国家の費用に充てる。それならばすなわち、人たるものはもちろん心力を尽くして国に報いなければならぬ。

### 【時代背景】

(評価のポイント)

この史料は明治五年に出された「徴兵告諭」であり、翌年には「徴兵令」が制定された。したがって、長州藩出身の大村益次郎、大村暗殺後は山形有朋を中心として徴兵制が創設された背景を理解しているかを問う問題である。徴兵制制定の前提には、身分制の解体(四民平等)が必要だったことを史料から読み取ることも重要であり、(AP1)に関する評価ポイントになる。また、出題の意図を反映した記述になっているか、歴史用語を正確に理解しているか、歴史的な原因・経過・結果・影響などの因果関係を正しく理解しているかなどは、(AP3)に関する評価ポイントとなる。

# 2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題及び解答例

研究科・専攻 【人文科学研究科 歴史学専攻 (東洋史学コース) 博士後期課程】
試験科目 【専門試験 歴史学一般】

## 【出題意図】

中国史研究に不可欠の文献史料に関する基礎的な知識を備えているかを問う。

〔問題〕 目録学について説明しなさい。ただし、下記の語句を用いること。

劉向 七略 中経新簿 李充 七志 文徳殿目録 七録 七林 『隋書』経籍志 四部分類

## 【解答のポイント】

中国史研究の基礎となる文献学についての知識があるか否かを問う。あわせて、中国の目録学が七部分類（実際は六部分類）から四部分類に変化したことを理解しているか、魏晋南北朝時代における歴史学の興隆について理解しているか等を問う。

# 2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題及び解答例

研究科・専攻 【 人文科学研究科 歴史学専攻（東洋史学コース） 博士後期課程 】
試験科目 【 外国語試験 英語 】

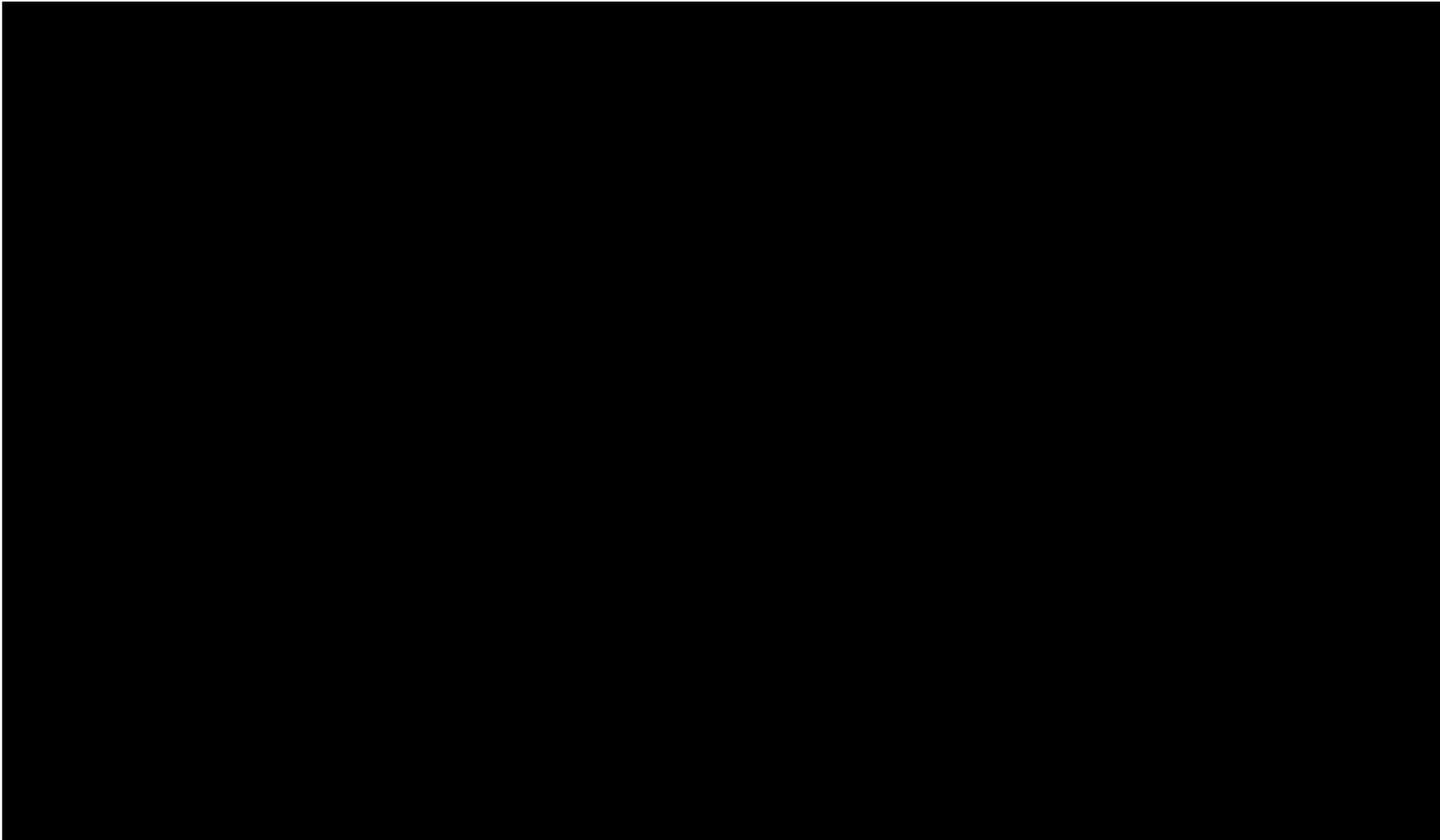
## 【出題意図】

英語の正確な読解力と文脈に即した日本語表現力を問う。

〔問題〕 次の英文を和訳し、解答を別紙解答用紙に記しなさい。

# 2026 年度 駒澤大学大学院 2 月 入学試験問題及び解答例

[解答例]



# 2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題及び解答例

研究科・専攻 【人文科学研究科 歴史学専攻 (東洋史学コース) 博士後期課程】
試験科目 【外国語選択試験 史料解読】

## 【出題意図】

漢文史料の正確な読解力と文脈に即した日本語の表現力を問う。

〔問題〕 次の漢文（『晋書』巻五十四・陸機伝所載「弁亡論」）を、（1）書き下し文に改め、（2）現代日本語に訳しなさい。

昔三方之王也、魏人據中夏、漢氏有岷・益、吳制荊・揚而掩有交・廣。曹氏雖功濟諸夏、虐亦深矣、其人怨。劉翁因險以飾智、功已薄矣、其俗陋。夫吳、桓王基之以武、太祖成之以德、聰明叡達、懿度弘遠矣。其求賢如弗及、卹人如稚子、接士盡盛德之容、親仁罄丹府之愛。拔呂蒙於戎行、試潘濬於係虜。推誠信士、不恤人之我欺。量能授器、不患權之我偏。執鞭鞠躬、以重陸公之威。悉委武衛、以濟周瑜之師。卑宮菲食、豐功臣之賞。披懷虛己、納謨士之算。故魯肅一面而自託、士燮蒙險而效命。高張公之德、而省游田之娛。賢諸葛之言、而割情欲之歡。感陸公之規、而除刑法之煩。奇劉基之議、而作三爵之誓。屏氣跼蹐、以伺子明之疾。分滋損甘、以育凌統之孤。登壇慷慨、歸魯子之功。削投怨言、信子瑜之節。是以忠臣競盡其謨、志士咸得肆力、洪規遠略、固不厭夫區區者也。故百官苟合、庶務未違。初都建鄴、羣臣請備禮秩、天子辭而弗許、曰、「天下其謂朕何。」宮室輿服、蓋謙如也。爰及中葉、天人之分既定、故百度之缺粗修、雖醜化懿綱、未齒乎上代、抑其體國經邦之具、亦足以爲政矣。地方幾萬里、帶甲將百萬、其野沃、其兵練、其器利、其財豐。東負滄海、西阻險塞、長江制其區宇、峻山帶其封域、國家之利、未見有弘於茲者也。借使守之以道、御之以術、敦率遺典、勤人謹政、修定策、守常險、則可以長世永年、未有危亡之患也。或曰、「吳・蜀唇齒之國也、夫蜀滅吳亡、理則然矣。」夫蜀、蓋藩援之與國、而非吳人之存亡也。其郊境之接、重山積險、陸無長轂之徑。川阨流迅、水有驚波之艱。雖有銳師百萬、啓行不過千夫、軸轡千里、前驅不過百艦。故劉氏之伐、陸公喻之長蛇、其勢然也。昔蜀之初亡、朝臣異謀、或欲積石以險其流、或欲機械以禦其變。天子總羣議、以諮之大司馬陸公、公以四瀆天地之所以節宣其氣、固無可遏之理、而機械則彼我所共、彼若棄長技以就所屈、即荊楚而爭舟楫之用、則天贊我也、將謹守峽口以待擒耳。

# 2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題及び解答例

【書き下し文】昔三方の王たるや、魏人は中夏に據り、漢氏は岷・益を有ち、呉は荆・揚を制して交・廣を掩有せり。曹氏は功これを夏に濟すと雖も、虐も亦た深ければ、其の人怨む。劉翁は險に因り以て智を飾るも、功已に薄ければ、其の俗は陋し。夫れ呉は、桓王これを基とするに武を以てし、太祖これを成すに徳を以てし、聰明叡達、懿度弘遠なり。其の賢を求めること及ばざるが如く、人を卹むこと稚子の如く、士に接しては盛徳の容を盡くし、仁に親しみては丹府の愛を罄くす。呂蒙を戎行より抜き、潘濬を係虜より試す。誠を推して士を信じれば、人の我を欺くを恤へず。能を量り器を授ければ、權の我に偏るを患へず。鞭を執り鞠躬し、以て陸公の威を重んず。悉く武衛に委ね、以て周瑜の師を濟す。宮を卑くし食を菲くし、功臣の賞を豊にす。懷を披き己を虚くし、謨士の算を納む。故に魯肅一面して自ら託し、士變險を蒙りて命を效す。張公の徳を高くし、而して游田の娛しみを省く。諸葛の言を賢として、而して情欲の歡を割く。陸公の規に感じ、而して刑法の煩を除く。劉基の議を奇とし、而して三爵の誓を作す。屏氣跼蹐、以て子明の疾を伺ふ。慈を分かち甘を損ひ、以て凌統の孤を育む。壇に登り慷慨し、魯子の功を歸す。怨言を削投し、子瑜の節を信ず。是を以て忠臣競ひて其の謨を盡くし、志士咸く肆力を得、洪規遠略、固より夫の區區たる者を厭はざるなり。故に百官苟も合し、庶務未違。初めて建鄴に都するや、羣臣禮秩を備へんことを請ふも、天子辭して許さず、曰はく、「天下其れ朕を何んと謂ふ」と。宮室・輿服、蓋し慊如なり。爰に中葉に及び、天人の分既に定まるが、故に百度の缺粗ぼ修まり、醜化懿綱すると雖も、未だ上代に齒せず、其の體國・經邦の具を抑へれば、亦た以て爲政めるに足る。地方は幾萬里、帶甲は將に百萬ならんとし、其の野は沃、其の兵は練、其の器は利、其の財は豊なり。東のかた滄海を負ひ、西のかた險塞に阻み、長江は其の區宇を制し、峻山は其の封域を帶び、國家の利、未だ茲より弘き者有るを見ざるなり。借使しこれを守るに道を以てし、これを御するに術を以てし、敦く遺典を率い、人の謹政するを勤め、定策を修め、常險を守れば、則ち以て長世永年すべく、未だ危亡の患あらざるなり。或ひと曰はく、「呉・蜀は唇齒の國なり。夫れ蜀滅ばば呉も亡ぶは、理として則ち然り」と。夫れ蜀は、蓋し藩援の與國なるも、而れども呉人の存亡には非ざるなり。其れ郊境の接するや、山を重ね險を積み、陸に長轂の徑なし。川は阨にして流れ迅ければ、水に驚波の艱あり。鋭師百萬ありと雖も、啓行は千夫に過ぎず、軸轡千里なるも、前驅は百艦に過ぎず。故に劉氏の伐つや、陸公これを長蛇に喩ふは、其の勢然ればなり。昔蜀の初めて亡ぶや、朝臣謀を異にし、或ものは石を積み以て其の流れを險にせんと欲し、或ものは機械して以て其の變を禦がんと欲す。天子羣議を總べ、以てこれを大司馬陸公に諮るや、公以へらく四瀆・天地の節を以て其の氣を宣する所、固より過ぐべきの理なく、而して機械則ち彼我の共にする所、彼若し長技を捨てて以て屈する所に就き、荆楚に即きて舟楫の用を争へば、則ち天我を賛け、將に謹みて峽口を守り以て擒を待たんとするのみ。

【現代語訳】むかし、三国が皇帝を称した際、魏は中原に拠り、蜀は益州を保有し、呉は荆・揚二州を制圧して交・廣二州に領土を広げた。曹氏は中原を統一する功績をあげるが、残虐なやり方も深刻だったので、民衆は恨みをいだいた。劉備は険阻な地の利を生かして賢そうに振る舞うが、もとより大した功績ではなく、卑しい田舎者である。さて、呉は桓王（孫策をさす）が武勇によって創業し、太祖（孫権をさす）が仁徳によって作りあげた国である。太祖は聡明で見識があり、美德は広大であった。賢人を求めることは常に十分ではないようであり、人民を慈しむことは赤子のようにであり、士大夫に接する際には徳をもって度量を示し、仁者に親しむ際には真心の親愛を尽くした。呂蒙を一兵卒の中から抜擢し、潘濬を降伏者の中から試用した。誠実をもって士大夫を信じるので、人に欺かれる恐れがなく、能力を測って権限を与えるので、人の権力に圧迫される憂いがない。鞭を取って腰を低くし、陸公（陸遜をさす）の權威を重くした。親衛隊をすべて委ね、周瑜の軍を助けた。宮殿を低くし食事を質素にし、功臣に対する賞賜を厚くした。胸襟を披いてへりくだり、謀士の策略を採用した。だから、魯肅は一面して臣従し、士變は険しい山を越えて命を捧げた。張公（張昭をさす）の徳を高く評価して、狩猟の娯楽を減らした。諸葛瑾の言葉を賢として、情欲の歡樂を絶った（出典不明）。陸公の諫言に感じ、煩雑な刑法の煩を廃止した。劉基の建議を評価して、三爵の誓い（酒に酔った状態での命令は無効とする）を立てた。息をひそめビクビクしながら、子明（呂蒙の字）の病気を心配した。慈愛を分かち食事を減らし、凌統の遺児を養育した。壇に登り慷慨し、魯子（魯肅）の手柄とした。讒言を廃棄し、子瑜（諸葛瑾の字）の節義を信じた。だから、忠臣は競って謀を尽くし、志士はみな力を尽くし、広大な計画は、もとより、あの小国を安泰にしない。ゆえに官僚たちは協力し、さまざまな仕事をするのに余念がない。建業に都をおいた当初、群臣たちは礼秩を整備するよう請願するが、天子（孫権をさす）は固辞して許可せず、言うことには、「天下の人々は朕のことをどう思うか」と。思うに、天子の宮室・輿服は不足していたが、中盤になると、天人の分がすでに定着したため、さまざまな制度・規則の欠落はほぼ修復され、芳醇な酒のように天下を教化しているとは言え、まだ上代の盛世には相手にならず、国家経営の道具を抑制しても、政治をおこなうのに十分である。地方は数千里、正規兵は百万になろうとし、平野は肥沃、兵士は熟練し、兵器は鋭利、財政は豊かである。東は大海を背負い、西は険阻に阻まれ、長江と険しい山が領土を区切る。これより弘大な国家の利点は、空前のものである。もし道理によって守り、法術によって統制し、遺典を尊重し、謹政を勤め、定策を修め、常に険阻を守れば、わが呉王朝は永遠に続き、滅亡の憂いはないだろう。ある人が言うには、「呉と蜀は唇と齒のように、密接な関係の国である。そもそも蜀が滅べば、呉も亡ぶというのは、道理として当然のことである」と。そもそも思うに、蜀は同盟国ではあるが、呉の人間の存亡には関わりがない。さて、両国の国境は険阻な山岳が積み重なり、大きな車輪の荷車が通れるような道はない。長江には流れの速い難所があり、波に驚かされるような困難がある。百万の精鋭があらうと、先陣を切るのは千人に過ぎず、千里に連なる大艦隊があらうと、先駆けは百艦に過ぎない。だから、劉備が呉を伐ったとき、陸公（陸遜をさす）が蜀軍を長蛇に喩えたのは、このような地勢だからである。むかし蜀が滅亡した当初、呉の朝臣たちは様々な謀を提案し、ある者は石を積んで長江の流れを険阻にしようと考え、ある者は仕掛けを作って異変を防ごうとした。天子は群議を総括し、大司馬の陸公（陸抗をさす）に諮問したところ、陸公が言うには、四瀆（四つの大河。黄河、長江、淮水、濟水をいう）と天地が時節によって運氣を伸ばすところ、もとより防ぐべきの道理はなく、仕掛けを作れば、魏と呉が共有し、もし魏が得意とする陸戦を放棄して不得意な水戦を選び、荆楚（長江中流域）に来て舟船を用いようとするれば、天は我が軍を助けるので、慎重に峽口を守り、敵が勝手に敗れるのを待つだけである。



# 2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題及び解答例

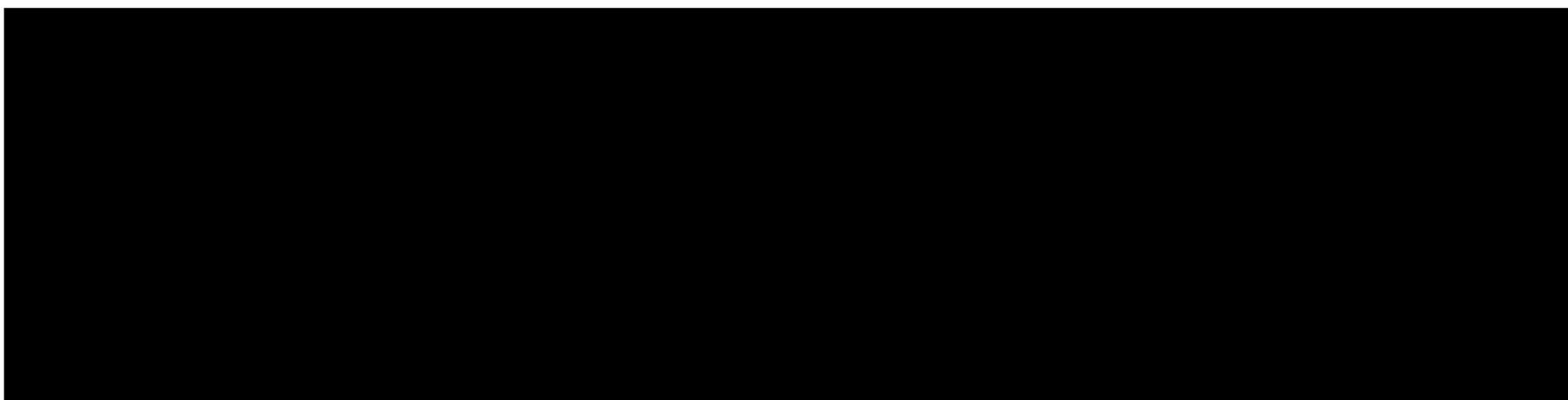
研究科・専攻 【 人文科学研究科 歴史学専攻（西洋史学コース） 博士後期課程 】
試験科目 【 外国語試験 英語 】

## 【出題意図】

西洋史学分野における知識や技能を修得し、博士課程での学修に必要な学力を有しているか。また、提示された諸情報・条件に基づき考察を行い、論理的な文章を書く力を有しているかを問う。

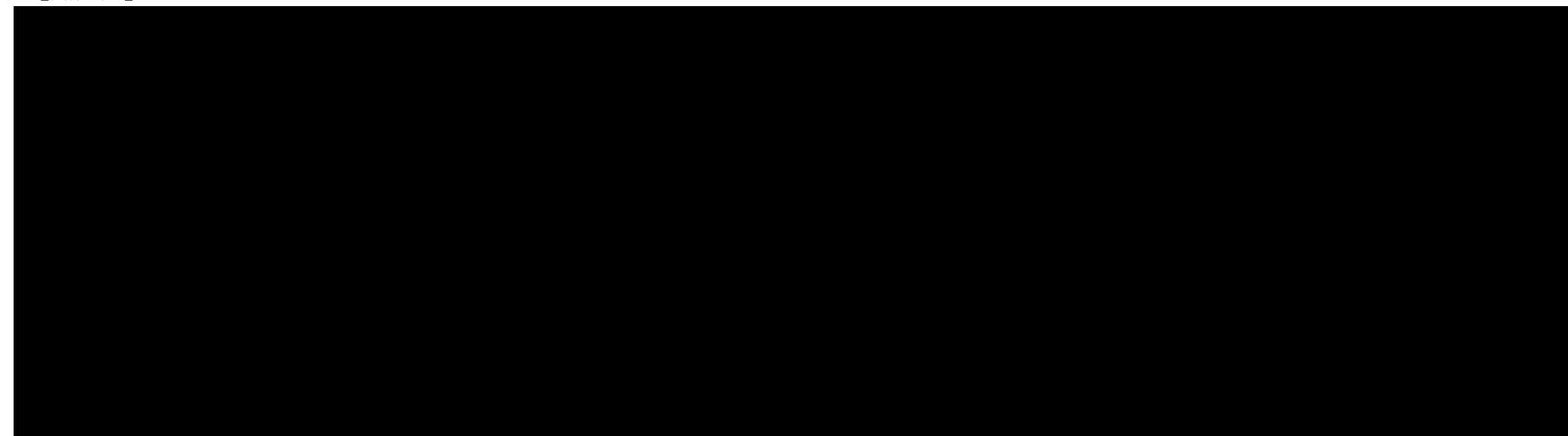
次の問題1から3のうち2問を選択し、解答して下さい。

【問題1】次の英文を邦訳してください。



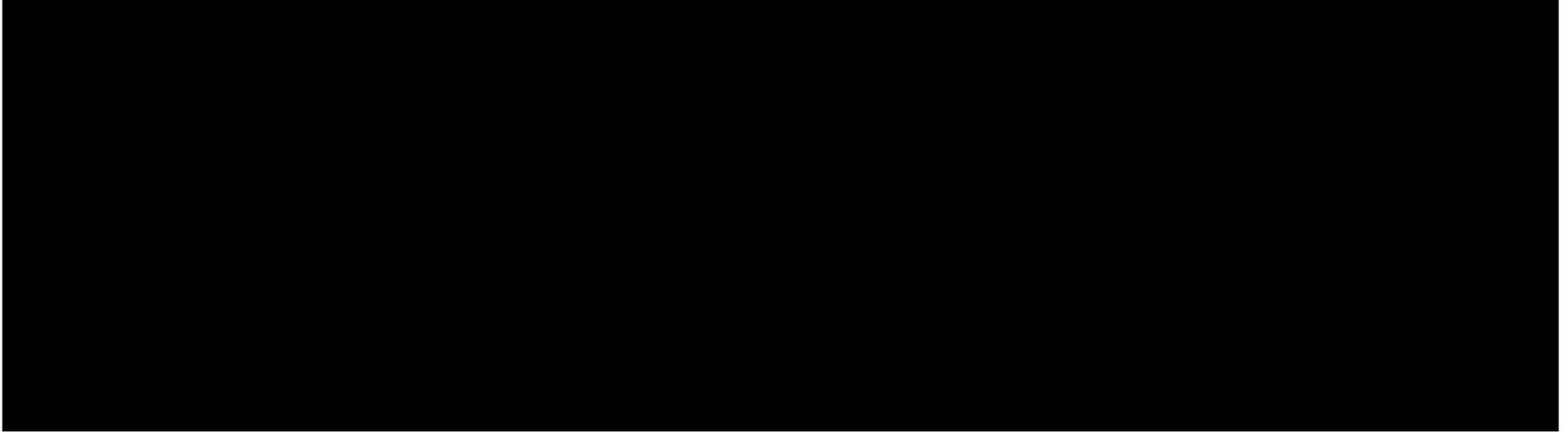
(出典： N.T. De Grummond, *Etruscan Myth, Sacred History, and Legend*, Philadelphia: University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology, 2006, p.1)

【翻訳例】



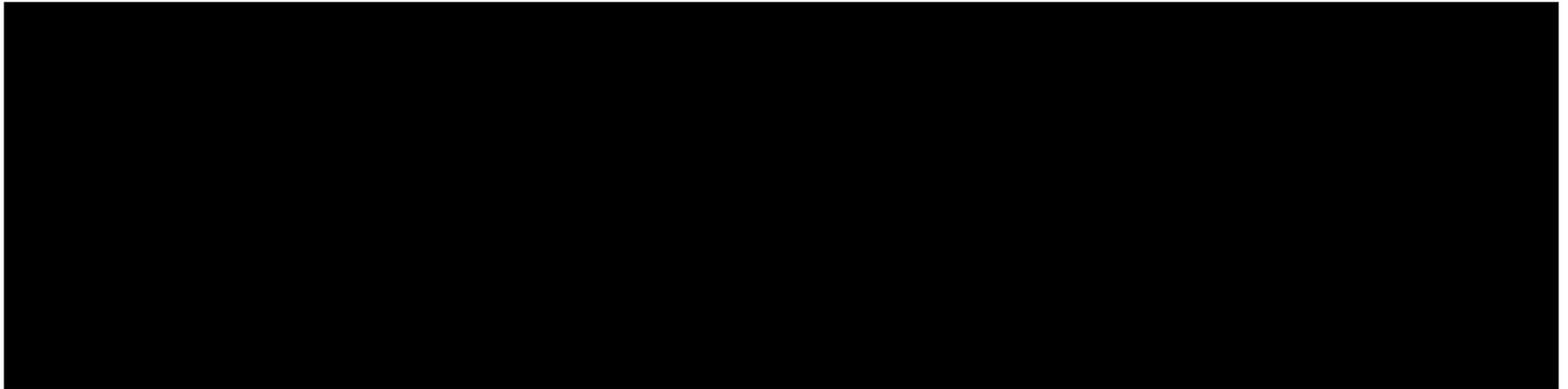
# 2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題及び解答例

【問題2】次の英文を邦訳してください。



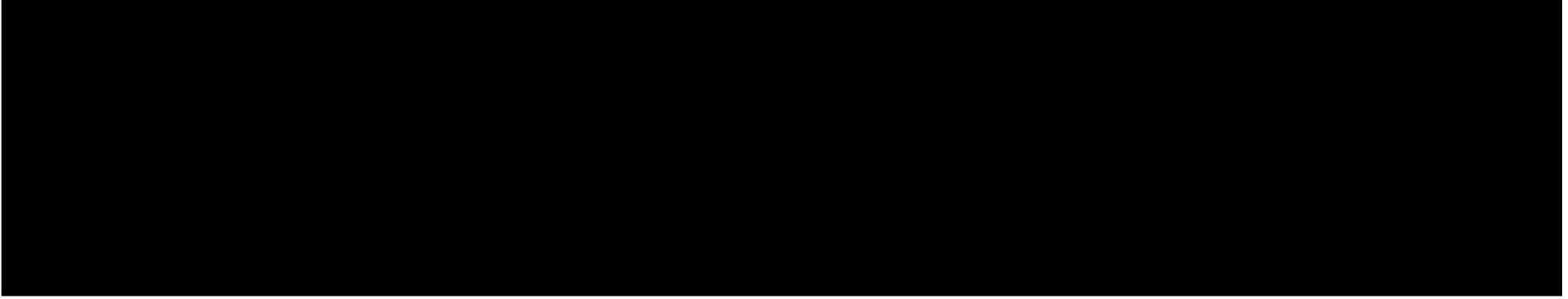
(出典 : David Parrott, *The Business of War: Military Enterprise and Military Revolution in Early Modern Europe*, Cambridge University Press, 2012, p.1.)

【翻訳例】



# 2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題及び解答例

【問題3】次の英文を邦訳してください。



(出典 : R. A. C. Parker, *Chamberlain and Appeasement: British Policy and the Coming of the Second World War*, Basingstoke/New York: Palgrave, 1993, pp. 74-75.)

【解答例】



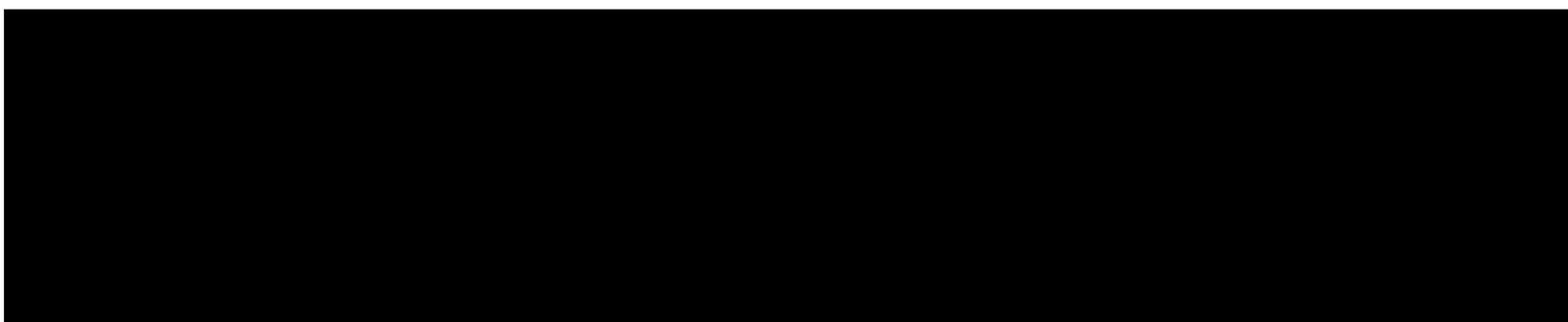
# 2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題及び解答例

研究科・専攻 【 人文科学研究科 歴史学専攻（西洋史学コース） 博士後期課程 】
試験科目 【 外国語選択試験 独語 】

## 【出題意図】

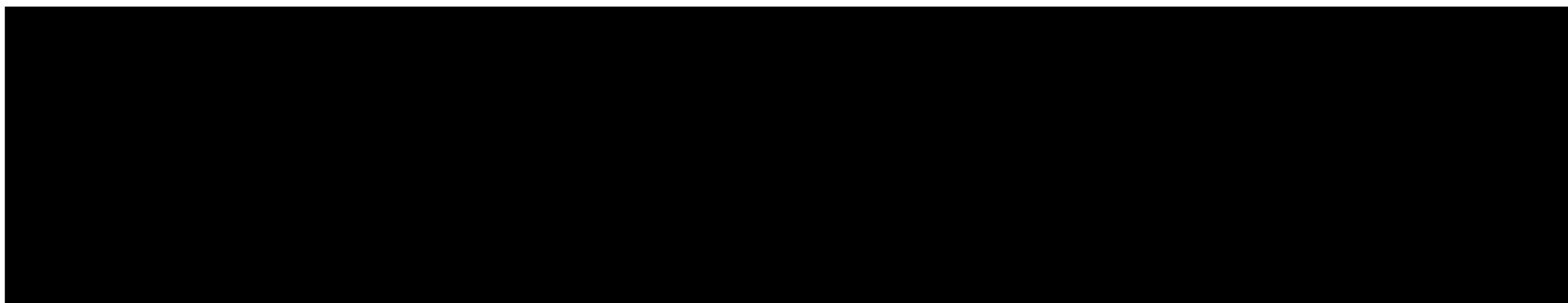
出題されている独文の構文を正確に理解し、それを正しい日本語に翻訳することができるかを判定する。

【問題】 下記の独文を邦訳してください。



(出典：Klaus Hildebrand, *Das vergangene Reich. Deutsche Außenpolitik von Bismarck bis Hitler*, 2. Auflage, Stuttgart: DVA, 1996, S. 460.)

## 【解答例】



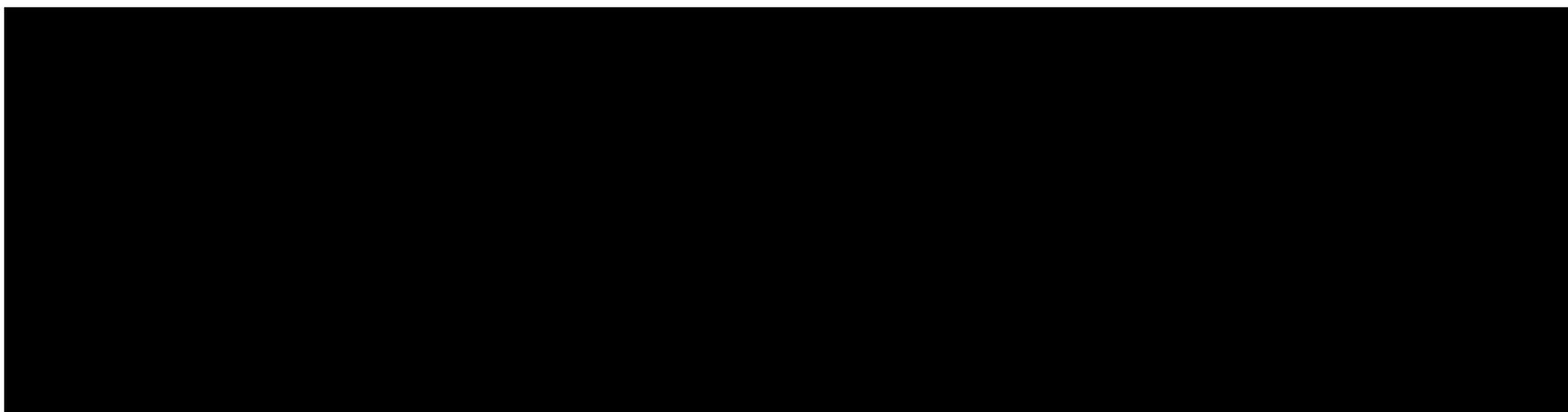
# 2026 年度 駒澤大学大学院 2 月 入学試験問題及び解答例

研究科・専攻
【 人文科学研究科 歴史学専攻（西洋史学コース） 博士後期課程 】
試験科目
【外国語選択試験 仏語 】

## 【出題意図】

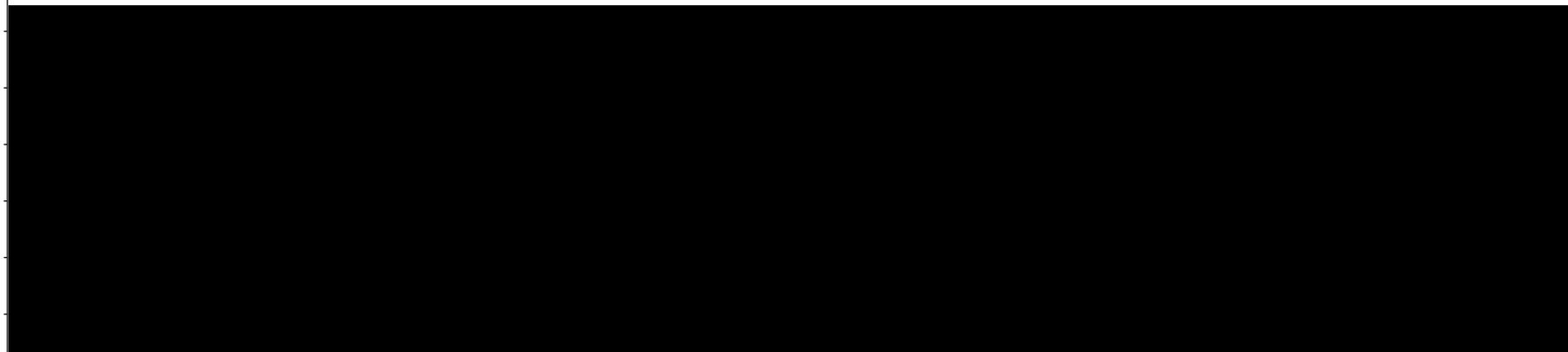
出題されている仏文の構文を正確に理解し、それを正しい日本語に翻訳することができるかを判定する。

【問題】下記の仏文を邦訳してください。



(出典: Gérard Sabatier, *Le prince et les arts, Stratégie figuratives de la monarchie française de la Renaissance aux Lumières*, Paris, Champs Vallon, 2010, p.104.)

## 【翻訳例】



---

---

---

---



2026 年度 駒澤大学大学院 2 月 入学試験問題及び解答例

【解答例】

